



日帰り旅行で、いちご狩りへ行きました。



施設長 貝沼 寿夫

教訓を生かす

ご利用者一人ひとりのために

新しい年を迎える前に、私は一年間を振り返ることがありました。私は障がいを持つご利用者の支援に10年携わることが出来ました。たくさんのお会い、たくさん喜び、たくさん想い、たくさん悩みに、ご利用者と一緒に関わらせて頂いたことは大変嬉しく思い、皆さまには感謝しかありません。

ご利用者との関わりでは、私を受け入れ、何気ない日常でも、朝は「おはよう」から夜は「また来てね」と1日をねぎらうような声掛けをしてくれます。この仕事をして障がいを持つご利用者と関わって良かったなあと思えることが毎日あります。私は、この仕事が本当に好きなのだと感じます。

人との関わり合いの中では障がいを持っていても、持っていない方でも常に「一人の人間である」ことを意識しています。障がいをもっているご利用者にとっては、その特性と環境による生活課題が影響することが多いのですが、その「人格までが障がいではない」と思います。様々な事情を抱えている方が入所施設にはいますが、私の仕事は、そのご利用者の生活をより良くすること、生活を自ら行える力を発揮させること、健康で地域の人たちとも共生していくこと、安定した生活を自ら作り出せるよう支援することです。そして、私たちの基本理念である「心と体をもっと大切に考え、自立と社会参加を援助する」ということを念頭に日々支援をさせて頂いています。

支援は「ご利用者一人ひとりのために」であり、決して身勝手な判断や施設に合わせた生活ではいけません。このことは、相談支援の事業を行う上でも、とても重要なことと考えています。

自分の支援に行き詰った時、心が折れそうな時、悩むこともあります。そういった時は、冷静になり自分の原点に振り返り、感謝する、得意なことを積極的にやってみよう、強みを生かす、何でも嬉しいことは共有することに切り替え、今後もより、「ご利用者一人ひとりのために」ということを忘れないように支援していきます。

昨年は知的・発達障がい者福祉サポーターズドリームプレゼンテーション通称「さぼ☆どり」2018にプレゼンターとして出させて頂きました。私がなぜ、福祉の仕事をしていきたいか、将来に向けて福祉の業界をどのような形で担っていききたいか、様々な業種の方のメンター（相手をやる気にさせる人）に応援を頂き、プレゼンをすることが出来ました。私は、困っている人やその関わっている人へのサポーターや相談員として仕事を続け、あらゆることを前向きに捉え「出番」を作っていきます。その中で「ご利用者一人ひとりのために」を意識して、家族やその関わっている方々にも良い影響をもたらして、笑顔でいられる生活を実現していきます。

相談支援専門員 佐藤 幸雄

未来鮮やかに

そろそろ部屋の明かりを消して一日を終えようかというときに、ふと思うことがある。今日、私は自分にできることを精一杯したのだろうか。そうして二度と訪れることのない時間を悔いなく生きたのだろうか。はじめはそんなふうにものを考える余裕もなかった。マニュアルを反芻しつつ無心で手足を動かし、帰宅すると泥のように眠った。慣れない現場での仕事はつらく、先輩の前で何度か泣いた。いまもその頃と変わらずこぶしに来るが、涙を流すことはもうない。誰かのちょっとした冗談で噴き出し、夜勤中に朝焼けを見つめてほっとする。日々私は私を取り戻して生きている。着実なるわが変化を実感する一方で、自らに重ねて問いたくなる衝動は決して止むことがない。まだやれるなら、どこまで。悩みながらも歩みつづけるほかにないとするれば、せめてこの長く険しい道のりを楽しんでゆきたい。鼻歌まじりに、マイペースで。こぶしでのひと時がそう教えてくれたのである。

生活支援員 濱野 智恵子

先月こぶし保護者会のご厚意で新年にふさわしい新年会が行われました。ご家族やゲストを交えての素敵な演奏会や昼食のおもてなしに、心より御礼申し上げます。
新年会前の1月17日のこと、あれからもう24年も経ったのか、そう感じた。日付を見て、お気づきの方もいらっしゃるだろうが、阪神淡路大震災よりこれだけの月日が経っていた。月日を重ねることにそのこと自体に心を馳せることは少なくなってきた気がするが、今でもあのテレビから流れてきた倒れた高速道路や戦時中かと思われてきたまう焼け野原の街の様子に戦慄を覚えた。あの光景を忘れることは、この先もきつとないだろう。その後も続くことまるごとの無い地震の被害に、被災された方に申し訳ないと思いつつも、改めて今日の生活が出来ていることに感謝してしまう。
1月17日の朝刊の社説でこんな記事を目にした。阪神大震災の翌日、すぐにボランティアに入った方のお話だった。市役所に入ったもののしばらくは何もできずの状態であり、その後もボランティア組織や避難所運営を円滑にできなかったとの内容だった。こうした経験から、いかに災害時のボランティアや救済物資を有効的・機能的に活かすかを考えるようになり、昨年一躍有名になられたボランティアのおじさんを筆頭に、災害や事故の際にスムーズに運営出来るようになったのを、ご存知の方も多いのでは...。
あと1か月半もすると、現場にフレッシュ

な新人職員がやってくる。毎年の新任研修の中でこれから先仕事をしていると、思い通りにいかないこと、失敗することだらけだと必ず話すことにしている。入職したての意気揚々な若者に、こんな話をするのは避けるべきことなのかもしれないが、現実問題事案のだから仕方がないと自分を納得させ、申し訳ないと思いつつも、声高らかに話してしまっている。

私たちの仕事は、対人援助。人と人が関わり、信頼関係を築いていくことが大前提である。それが出来ると比較的うまくいく可能性は高い。しかし、私もそうだがその日の体調やご機嫌次第で結果が変わる時もある。昨日上手くいったことが、今日も上手くいくとは限らない。その反対もしかり。残念ながらも、この仕事は、マニュアルにすべてを網羅することもできないし、正解があるわけでもない。だからこそ、いろいろと創造し工夫することが必要な仕事だし、そこがこの仕事の面白みであり、やりがいなのだと思う。

災害も失敗も、起こってしまったことは、時を巻き戻して元通りにすることもなかったことにすることは出来ない。支援も、きつと失敗がない方がよい。でも、失敗がないことは不可能で、それをどう次に生かすしかない。災害時のボランティアが機能的に動くことができたように、失敗を教訓にすることが大切なんだ、そして日頃の失敗もあながち悪いことではないと24年目の日に改めて感じさせられた。

フォトニュース

日帰り旅行 ～いちご狩り～



新年会



保護者会主催の新年会を開いていただきました。素敵な会をありがとうございました。

ふわっとんだより

新しい年を迎え、ふわっとんはますます元気に活動しています。新しいメンバーも加わり、皆で日々頑張っています。

前回、前々回とキッチン周りの作業の紹介をしておりましたので、今回は清瀬の2階作業室で行っている作業についてご紹介します。色々な企業から箱折りや組立、封入、封緘、袋詰め、紙工作、検品などの作業をいただき、全員が様々な工程を分担し、納品日に合わせて毎日取り組んでいます。短期間で1000、2000という大きな単位での納品数に、果たして納期までに終わるのか？と不安になることもあります。皆本当に意欲的に作業に取り組み、必ず仕上げてくださっています。



一仕事終了後は、皆達成感に満ち溢れた顔で喜びを分かち合っています。

特に最近は準備から片付けまで利用者さんだけでできるようになってきており、「自分たちの仕事」という意識が高まってきているのを感じます。

ふわっとんはこのように、キッチン・喫茶店作業と外部受注の作業の両方を、当番を決めて毎日同時進行で取り組んでいます。来店されるお客様から見えなくても、みんな頑張っています！



“ねえねえ、きいて”



<佐藤 里胡>

普段あまり笑顔を見せてくれない利用者様があります。その利用者様が時折笑顔を見せてくれた時には私も嬉しくなり最大限の笑顔で応えるようにしています。

私が疲れた表情をしていると気づいて「肩揉もうか？」と聞いて下さる利用者様があります。少しの変化も見逃さない所に感動し、その優しさに愛を感じています。